

園長室の窓から

黒田 成子

このような仮の題を編集の方から頂いたが、一四〇坪しかない狭い敷地にあるわが園舎には園長室さえない。実は六年前、園舎を改築した時、たとえ狭くとも園長室があった方が良くと考え、一坪余の園長室を作った。

ところが一年もたたないうちに隣りの職員室で始められた母親達の勉強会が予想より人数が多くなり、とうとう職員室につづく園長室の壁をこわすことになった。壁の代りにアコーデオンのしきりができ、お母様達の人数は少々ふえても園長室の方へ腰かけられるようになった。いつしかアコーデオンのしきりはいつも開放されたままとなった。少しのスペースでもあればただちに利用するわが園のやり方、たちまち季節外の絵本やダンボール箱等の置き場となってしまった。しかし、園長室の壁が消えたおかげで、隣りの先生方やお母様方と自由に話ができるようになった。これが一番の大きいメリットであった。

さて、此処にいつも私が心をひかれるのはホールや庭や二階などで遊んでいる子ども達のことである。が、園長事務等のためになかなかゆっくりと子ども達の仲間入りがで

きないことが残念である。子ども達もよく心得たもので、私が皆はどうしているかしらと思つてチェックするような気持で一通り見て歩くときは気にもとめない様子である。しかし、私がゆっくりとたたずんでいたり、じゅうたん階段に坐つてリラックスした気持でいたりすると、すぐ膝の所によつてきたりする。また、「○ちゃんどこへ行ったの?」とか「これ一寸持つていて」「歯がグラグラしているの」等と言いにきたりする。

私は専任の園長になつてまだ六年足らずだが、なりたての頃は子ども達の遊びを見ているのが何かはがゆい気がしたものである。たとえば年長児といえはもう六歳の子どももかなりいる。それにもかかわらず遊びが少しも発展せず、だらだらとしている等と疑問に思つたものである。

しかし、子どもとの生活を日々体験して子どもから学んだことは、子ども達の遊びとは実はこの渾沌とした試行錯誤的などころが大切であるということであつた。たとえば新園舎の階段の下にある狭い穴ぐらのような所は当初は大人用の椅子や不用の道具を入れておく場所に予定されていた。ところがここはたちまち子ども達の遊び場として、ままごととか基地ごっこ、おぼけごっこ等の遊びにつかわれるようになってしまった。

ある朝六歳の男児たちがその場所を積木で陣取り、入口にはカーテンをさげ、他の子どもが「入れて」と言つても、容易には入れてもらえなかつた。先に場所をとつた子ども達はそれまでにいろいろのプロセスを経て固い結束ができていたのである。はいれない子ども二人は次から次へと条件を工夫して持つてくるがそう簡単には入れてもらえない。紙面

の都合で詳細には記せないが、この子ども達が先のグループに入ることができたのは遊びが途中で中断したり、何日も時がたってからであった。それも外から傍観していた子どもたちと別の遊びが始まり、それが階段下のグループと合流した形で成立したのであった。

遊びの形は楽しく、仲よく、スムーズに運べたらしいと思うのは子どもを知らない大人の考え方である。生活の中では思うようにいかない相手との衝突や激しい言い合いや、戸惑いや妥協等があり、いろいろの廻り道をしてやっと自分なりに辿りつく「あっそうか」と思う気持や満足感が、何とも言えない喜びとなるのではないだろうか。

子どもの遊びとは始めから筋が出来るものではなく、いろいろやっていくうちに次第に道がついていく。保育者が秩序立てるものではなく、子ども自らが始めた活動を自らの手で試行錯誤しながら遊びぬいていくことが大切である。一年間の反省をしながら新しい年にも一層子ども達が、一つ一つの遊びに集中できる楽しい日々を持てるように、保育に携わる私達の役割をも改めて考えたいと思う此の頃である。

(武蔵野相愛幼稚園)